天平五年癸酉、遣唐使の船難波を発ちて海に入る時に、親母の子に贈る歌一首　并せて短歌

一七九〇番

秋萩を　妻どふ鹿こそ　独り子に　子持てりといへ　鹿子じもの　我が独り子の　草枕　旅にし行けば　竹玉を　しじに貫き垂れ　斎瓮に木綿取り垂でて　斎ひつつ　我が思ふ我が子　ま幸くありこそ

反歌

一七九一番

旅人の　宿りせむ野に　霜降らば　我が子羽ぐくめ　天の鶴群